

埼玉県で、三期目折り返しを過ぎた上田清司知事をめぐって、ちよつとした論争が起きているようだ。

上田氏は二〇〇三年八月の知事選で、自身の任期を三期十二年とする「多選自粛条例」の制定をマニフェストに掲げて初当選。翌年、約束通り条例を成立させた。

条例の意義について、その後の県議会でも『花は十日紅くならず、権力は十年久しからず』という言葉がある。これは大方の真実ではないか』などと説明していた。ところが、三期目の折り返しに当たる今年八月の記者会見で「(条例は)あくまで自粛を旨とするが、法律に縛られているわけではない。私自身の意思と周辺の期待があれば、その時点で(四選出馬を)考えることがあるかもしれない」と、前言撤回とも取られかねない発言をしたのである。これが論争の発端となった。

上田氏周辺には、条例を見直してでも続投すべきだとの意見があるようだ。上田氏はその後の議会答弁でも「この条例により仕事に集中できた。条例は目的ではなく手段とも言える」と強調。県議会からは「自分でつくった条例を自ら破るのは筋が通らない」などと、反発の声が上がっているという。

多選自粛条例の制定は、二〇〇〇年代の初めごろから全国の自治体に広がった。上田氏が早々と公約に掲げたことで、清い

## 多選自粛とレームダック

リーダーとの印象を与えて好感されたのは間違いない。有権者をあざむいたのだとしたら言語道断だ。どんな理屈をこねようと許されるものではない。それとも、上田氏には、隠された別の意図があるのだろうか。

道内のある首長がこんなことを言っていた。「進退だけは絶対に早く言ってはいけない。辞任話が流れると、一瞬で人は寄りつかなくなるし、物事を動かす力も落ちる。権力とはそういうものだ。首長の仕事やりにくくなつては、有権者に対しても失礼だ」。つまり政治家が求心力を維持し続けるためには、ぎりぎりまで「次もやるかもしれない」と周囲に思わせなければならぬということわけだ。

米国の大統領領のように、憲法で当選回数が制限されている場合、政権末期のレームダック(死に体)化は避けられないと言われるが、多選禁止条例や多選自粛条例も結果的にそうした現象を生むのだろう。上田氏の場合、単なる権力欲の表れなのか、レームダック化を恐れた駆け引きの一環なのか。真相は、一年半余り後の選挙が近くならなければわからない。

北海道の高橋はるみ知事も、四選出馬問題が取りざたされている。しかし、道内では、一般に多選の範疇に入るとされる四選の是非について、あまり議論になっていないのが不満だ。埼玉県は、真つ先に多選が問題になるだけでも、条例を制定した意味

があつたと言えるのかもしれない。

北海道の歴代知事は、二期八年だった堀達也氏を除いていずれも三期十二年で辞めている。「四選不出馬」は大抵、新聞が特ダネとして正式表明前に報じており、町村金五氏が任期満了の約一年十カ月前、堂垣内尚弘氏が約二年十カ月前、横路孝弘氏が約一年四カ月前に紙面化された。

堂垣内氏に至っては、任期満了の二年も前に自ら記者会見を開いて四選不出馬を正式表明した。後継候補の選挙準備への配慮があつたとはいえ、その後はレームダック化との戦いだつただろう。

高橋知事の場合はどうか。今のところ無言を貫いており、歴代知事のように「三期で終わり」が規定路線にはなっていない。四選に意欲を持っているのか、残り任期のレームダック化を避けようとしているだけなのか。参院選への転出をにらんでいるとの見方もあり、構図はなかなか複雑だ。

ただ、いずれにせよ、多選は権力の私物化を招きかねない。政治的な独善やマンネリ化、議会とのなれ合い、業界との癒着など、懸念材料は上げればきりがなく、実際それとの戦いとなるだろう。

高橋知事はその批判を押しつけてでも、やりたいことがあるのか。情性では四選の壁に臨めない。その気なら、相当な覚悟が必要だし、口を閉ざさず、自ら多選容認論の論争に挑むべきだ。

八由▽